
『鎌倉大日記』にみる 15 世紀の関東地震と 江の島の隆起・沈降

片桐 昭彦

(東京都練馬区文化・生涯学習課)

はじめに

中世の地震研究にとって年代記は欠かせない。とりわけ地震の記事が詳しく記される日記が残っている首都京都やその近郊とは異なり、京都から離れた東国等の地震研究にとって地震の記事が記される年代記は重要である⁽¹⁾。

本稿は、『鎌倉大日記』に記される地震の記事を検討することにある。『鎌倉大日記』は、中世の武家の補任年表および年代記であり、とくに南北朝期以降の鎌倉府を中心とした関東の記事を伝える史料として知られ、複数の写本が残されている。

臼井信義氏によると、『鎌倉大日記』は、生田本と彰考館本の二系統に分けられるとする。そして、生田本（生田美喜蔵氏所蔵）は、①旧喜連川家伝来の善本であること、②治承4年（1180）から永享11年（1439）までの記述があり、筆跡や内容から、応永初年頃に既存の年代記を手本に足利将軍と関東足利氏を加えた年表として作られ、これを応永20年代（1413～22）頃に書写し永享11年頃まで追筆したこと、③各年の裏には、その年の重要な出来事が記載されている点をあげる。いっぽう彰考館本は、治承4年（1180）から天文8年（1539）までの記述があり、生田本にはない永享12年から明応5年（1496）頃までの記載事項が多いが、他の史料との間に異同があり、しばしば疑問の箇所があるとされた⁽²⁾。

そこで私は以前、あらためて『鎌倉大日記』の書誌学的な検討を行った。その結果、『鎌倉大日記』彰考館本の原本は、①14世紀半ば頃に鎌倉公方家に仕えた者が書き始めた『鎌倉大日記』の原形をもとに段階的に書写、あるいは加筆・修正がなされ、複数の系統本・写本ができたこと、②少なくとも応仁元年（1467）から文亀元年（1501）までの年代記記事の大部分は、後柏原天皇の在位期間、とくに文亀元年から間もない時期に、鎌倉あるいはその近辺に住む者が加筆した同時代の史料であること、そして、③国立公文書館に所蔵される書籍館旧蔵本（書籍館本）は、生田本・彰考館本とは異なる系統の近世の写本であることを明らかにした⁽³⁾。

前述のように生田本も、応永20年代頃に書写され、永享11年（1439）まで追筆されて成立していることから、少なくとも15世紀初め頃から永享11年までの年代記記事は同時代の史料として利用できる。したがって、『鎌倉大日記』の年代記記事は、諸写本の史料的性格をふまえて相互補完的に用いれば、15世紀の記事については、ほぼ同時代の史料として扱うことができると考えてよいのではなかろうか。

そこで本稿では、『鎌倉大日記』に記される15世紀の地震記事を検討し、15世紀の関東地震について考えてみたい。

1 『鎌倉大日記』の15世紀の地震記事

まず、『鎌倉大日記』に記される15世紀の地震関連の記事を以下に列挙する。なお、生田本⁽⁴⁾、彰考館本⁽⁵⁾、書籍館本⁽⁶⁾の記事のうち異同があれば並べて記す。

- A 応永23年(1416) 彰考館本は記事なし
自四月比、伊豆大嶋連々焼天震動ス、禪秀陰謀故歟、(生田本)
自四月比、伊豆大嶋連々焼、禪秀謀反口也、(書籍館本)
- B 応永27年8月11日(ユリウス暦1420年9月18日)
八・十一卯剋、大地震、(生田本) 彰考館本・書籍館本は記事なし
- C 永享5年5月21日(ユリウス暦1433年6月8日)
五・廿一午剋、地震、(生田本)
五月廿一日午刻、大地震、(彰考館本・書籍館本)
- D 永享5年9月16日(ユリウス暦1433年10月28日)
九・十六夜子剋、大地震、山崩、築地悉顛倒、夜中動事三十余度、惣而其後廿ヶ日計、昼夜動事数十度也、(生田本)
九月十六日子刻、大地震、夜中三十余度、築地倒懸、廿ヶ日間不止地震、(彰考館本)
九月十六日子刻、大地震、夜中三十餘度、築地倒懸而、其後廿ヶ日間、不止地震、(書籍館本)
- E 永享11年9月18日(ユリウス暦1439年10月25日)
九・十八亥剋、大地震、(生田本) 彰考館本は記事なし、書籍館本は永享12年
- F 永享12年9月18日(ユリウス暦1440年10月13日)
九月十八日、大地震、(書籍館本) 生田本は永享11年、彰考館本は記事なし
- G 享徳3年12月10日(ユリウス暦1454年12月29日)
十二月十日、大地震、(彰考館本・書籍館本)
- H 寛正6年9月13日(ユリウス暦1465年10月3日)
^(9月)同月十三日夜、大流星、震動鳴、(彰考館本・書籍館本)
- I 文明2年12月6日(ユリウス暦1470年12月28日)
^(12月)同六日、内侍所鳴動、(彰考館本・書籍館本)
- J 文明3年7月3日(ユリウス暦1471年7月20日)
七月三日、多田廟鳴動、(彰考館本・書籍館本)
- K 文明18年(1486)
相州江島前海忽成陸、明応地震又為海、(彰考館本)
相州江嶋前海忽成陸、明応地震又成海、(書籍館本)
- L 明応4年8月15日(ユリウス暦1495年9月3日)
八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余、九月、伊勢早雲、攻落小田城大森入道、(彰考館本)
八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢入大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余、九月、伊勢早雲、攻落小田原城大森入道、(書籍館本)

以上が『鎌倉大日記』に記された15世紀の地震関連記事である。

応永23年(1416)の伊豆大島噴火による震動の記事A、および文明2年(1470)に京都内裏の内侍所(神鏡を安置する賢所が所在する)、翌3年に多田廟(多田院、現兵庫県川西市の多田神社)で鳴動が起きた記事I・J以外の記事には、いずれもどこで起きた(あるいは実感した)地震である

か記されない。とくに記事B・C・E・F・Gは、「大地震」としか記されない。これらの場合どこで発生した地震であろうか。

Dの生田本記事によれば、永享5年9月16日（1433年10月28日）の夜子刻（午前零時前後）に大地震が起こり、山崩れが起き、築地塀が悉く倒れたこと、また、夜中の間に30回余りの揺れがあり、その後20日間ほど昼夜余震が数十回あったとされる。この記事には、地震の発生時間やその規模（被害）、余震の回数などが記されるが、どこで起きた地震かは記されない。

しかし、この地震については、同時代に生きた伏見宮貞成親王の日記である『看聞日記』にも記される。同年9月16日条に「今夜、大地震、両度、帝尺動也」と記され、京都でも大地震であったことがわかるが、同年10月26日条には「抑関東有不思議之恠異、先大地震、堂舎顛倒、人多死、又八幡宮鶴岡敷、金燈爐焼失全焼云々、又、刀祢川逆ニ流云々、凡四ヶ條有不思議、今一ヶ條不聞、去夏秋之間事也」と記される⁽⁷⁾。すなわち、関東では京都よりも大きな地震が起こり、堂舎が倒れ、人が多く死に、八幡宮の金燈籠が全焼したこと、また利根川が逆流したことが、1ヶ月余り後には京都まで情報として伝わっていたことがわかる。

つまり、記事Dの9月16日の子刻に起きた地震は、関東に大きな被害をもたらした地震であったのであり、『鎌倉大日記』の筆者が所在した鎌倉かその近辺において実際に見聞したり感じたことであったと考えられる。年代記の筆者が、自明のこととして記したために、記事には主語や特定の場所が記されなかったと言える。言い換えれば、『鎌倉大日記』の記事において主語や特定の場所が記されない場合には、筆者が所在した鎌倉かその近辺でおきた出来事であると考えてよいだろう。

あらためて『鎌倉大日記』の15世紀の地震記事において、主語や特定場所が記されない地震の記事をみると、Cの生田本記事以外はすべて「大地震」と記される。「大地震」であるからこそ、年代記である『鎌倉大日記』に記されたのである。

『鎌倉大日記』に記される15世紀に鎌倉かその近辺で発生した「大地震」は、応永27年8月11日（1420年9月18日）、永享5年5月21日（1433年6月8日）、同年9月16日（1433年10月28日）、永享11年（1439）か永享12年の9月18日、享徳3年12月10日（1454年12月29日）、明応4年8月15日（1495年9月3日）の6回ということになる。

『鎌倉年代記』は日記ではなく年代記であるので、そこに記される地震は、日常的に起こる被害のない有感地震ではなく、十数年に一度、数十年に一度に発生するような特記すべき大地震であるからこそ記されたと考えられる。したがって、『鎌倉大日記』に「大地震」としか記されないからといって、単なる一地震として見過ごしてはならない。

その100年に6回しか発生しないような大きな地震のなかでも、具体的な被災状況が記される地震は、前述した永享5年9月16日の地震（記事D）と、明応4年8月15日の地震（記事L）のみである。後者の明応4年の記事には、鎌倉の具体的な地名が記されるとともに、唯一洪水（津波）のあったことが記される。

記事Lによれば、発生した大地震の津波により、由比ヶ浜の海水が鶴岡八幡宮の千度檀（段葛）まで達し、水勢は大仏殿（現鎌倉市長谷の高徳院境内一帯）の境内まで入り込み建物を壊し、溺死者は二百人余りであったとする。明応4年の地震は、鎌倉に大きな被害を及ぼす津波を起こすほどの巨大な地震であったことになる。

2 明応4年の地震と江の島の隆起・沈降

前述のように、私は以前、『鎌倉大日記』の明応4年（1495）の鎌倉地震津波の記事Lは、その文言に誇張等のある可能性はあるものの、十年足らず前に近所で発生した出来事を記している点にお

いて信頼できる記事であると位置づけた。これにより、明応4年の地震は、金子浩之氏の静岡県伊東市発掘調査による津波堆積物の発見等の研究成果⁽⁸⁾もふまえれば、鎌倉の鶴岡八幡宮の千度檀(段葛)や大仏殿だけでなく、静岡県伊東市等まで津波を及ぼすほどの規模の大きな関東地震、すなわち、相模トラフでのフィリピン海プレートの沈み込みに伴うプレート境界地震であった可能性が考えられる。

過去の相模トラフの巨大地震は、元禄16年11月23日(グレゴリオ暦1703年12月31日)の元禄関東地震(元禄地震)、および大正12年(1923)9月1日の大正関東地震(大正地震)が知られている。しかし、明応4年(1495)の地震もその可能性が高くなったことにより、およそ200年の周期で相模トラフ地震が起きたことが想定されることになる。したがって、あらためて明応4年の地震に関わる記事を分析することは、およそ100年後に発生する可能性のある相模トラフ地震の予兆や指標を提示することになり重要であろう。

そこで注目されるが記事Kである。記事Kによると、文明18年(1486)に相模国江の島(現神奈川県藤沢市)の前にある海がたちまち陸となったが、「明応地震」の際に再び海になったとある。「明応地震」とは、『鎌倉大日記』の明応年間の唯一の地震記事である記事L、すなわち明応4年の地震と考えてよいだろう。つまり、明応4年の相模トラフ地震時に、江の島と陸続きとなっていた部分が沈降して海になったことになる。江の島と陸を繋ぐ部分が沈降するかどうかは相模トラフ地震の目安となるかどうか注目する必要がある。

また、文明18年に江の島と陸とを繋ぐ部分が隆起した原因はどこにあるだろうか。この時に鎌倉や関東周辺で地震などの地殻変動があったかどうかについて、『鎌倉大日記』には記されておらず、他の文献史料にも現在のところ確認できない。

では、過去の相模トラフ地震により江の島に変動はあったのであろうか。

元禄地震は、震央は房総半島沖の海域の沖合型(海溝型)地震であり、推定マグニチュードは7.9~8.2とされる。この地震では、房総半島南端を中心に最大5m隆起し、野島崎はこのとき陸続きとなったとされ、房総半島南端の布良港や館山市の柏崎浦付近は一部乾陸となり、干鰯場あるいは水田・住宅地となったが、鋸南町保田付近(仏崎)では土地の沈降により寺領の農地が失われたという⁽⁹⁾。いっぽう、大正地震は、神奈川県西部の松田付近を震源とし、深さ推定25km、推定マグニチュードは7.9とされる。この地震では、震源での大変動による土地の上下変動は、上盤側の房総半島から三浦半島さらには伊豆半島の付け根にかけて、最大で2m近く土地が隆起し、いっぽう下盤側の伊豆半島ではやや沈降したところもあるとされる⁽¹⁰⁾。

元禄地震と大正地震を比べると、元禄地震のほうが房総半島(とくに南房から外房地域)における地殻変動や津波の規模が大きかったとされるのに対し、三浦半島や大磯海岸周辺ではほぼ同規模であり1~2mほどの隆起が生じたとされる⁽¹¹⁾。

そのなかで江の島については、今村隆正氏が、江の島の漁師町に残る南北に帯状に並行する標高の異なる3段の面について古写真、地形図、地元の古老の話をもとに、上段面は元禄地震以前の陸地、中段面は元禄地震で隆起した陸地、下段面は大正地震で隆起した陸地であると位置づけ、元禄地震と大正地震の際に、江の島付近は約1m前後の隆起があったとしている⁽¹²⁾。

また、渡部瞭氏も、大正期と昭和期の地図を比べると、江の島頂上の三角点の標高が1m余り高くなり、島の周囲の岩礁面積も増えており、それまで海面付近にあった波食棚や海面下にあった海食台が隆起し、千畳敷などと呼ばれる岩棚になったとする⁽¹³⁾。

したがって、元禄地震・大正地震において江の島はそれぞれ1mほど隆起したことになる。過去の2例で言えば、相模トラフ地震がおきると江の島は隆起している。

しかし、『鎌倉大日記』の記事によると、明応4年(1495)の地震では、文明18年(1486)に隆

起していた江の島が沈降したとある。このことは、明応4年地震の地殻変動の在り方が、元禄地震・大正地震のそれとは異なることを意味するのであろうか。明応4年地震と元禄地震・大正地震が、同じ型の相模トラフ地震と見なしてよいのか検討が必要であろう。

では、明応4年地震の9年前に起きた文明18年の江の島の隆起についてはどう捉えればよいのであろうか。過去に文明18年、元禄地震、大正地震以外の時に江の島の隆起はあったのだろうか。

鎌倉幕府の歴史を編年体で綴った『吾妻鏡』の建保4年(1216)正月15日条には、次のように江の島が隆起したとみられる記事がある。

M 十五日己巳、晴、相模国江嶋明神有託宣、大海忽變道路、仍參詣之人、無舟船之煩、始自鎌倉、國中緇素上下成群、誠以末代希有神變也、三浦左衛門尉義村為御使、向其靈地令帰參、嚴重之由申之⁽¹⁴⁾、

記事Mによると、相模国の江島明神の託宣があり、江の島と陸続きとなったため、参詣人は船に乗る必要がなくなり、鎌倉はじめ国中から緇素(僧俗)上下が群れをなすほどであったという。すなわち、建保4年正月15日(ユリウス暦1216年2月4日)以前に江の島が陸続き、すなわち江の島が隆起したと考えられる。

この江の島の陸続きについて、伊藤一美氏は、『吾妻鏡』の記事によると建保元年(1213)元旦、5月15日・21日、同2年2月、同3年8月～9月の連日と地震が引き続いて起きたために海底に隆起現象が起こったのではないかとしている⁽¹⁵⁾。原因は判然とはしないが、たしかに江の島の隆起は、相模トラフ地震のような巨大地震ではなくても起きていたことがわかる。

ただ、明応4年(1495)の地震と文明18年(1486)の江の島の隆起に関連性があるとするならば、江の島の隆起が生じた建保4年(1216)だけでなく、それ以後に巨大な地震が起きたかどうかについて考えることも重要である。『鎌倉大日記』によれば、文明18年以前には再び江の島は沈降し、少なくとも陸続きとなっている部分が海に沈んでいたことになるからである。建保4年以後に江の島を沈降させた地殻変動について検討する必要がある。

おわりに

本稿では、『鎌倉大日記』に記される地震記事を取りあげ、15世紀の関東地震、とくに明応4年の地震とそれともなう江の島の隆起・沈降について考えてみた。その結果、明らかにしたこと、指摘したことは以下のとおりである。

1. 『鎌倉大日記』の記事において、主語や特定の場所が記されない場合は、年代記の筆者が所在した鎌倉かその近辺でおきた出来事であると考えられること。
2. 『鎌倉大日記』によれば、15世紀に鎌倉かその近辺で大きく揺れた「大地震」は6回あったこと。100年に6回しか記されない大きな地震であるから、『鎌倉大日記』に「大地震」としか記されなくても見過ごしてはならないこと。
3. 元禄地震・大正地震ではそれぞれ1mほど隆起したとされる江の島は、『鎌倉大日記』によれば、明応4年(1495)の地震では沈降したこと。但し、地震の起こる9年前、文明18年(1486)には隆起していたこと。
4. 江の島の隆起は、元禄地震・大正地震の相模トラフ地震のような巨大地震の時ではなくても、少なくとも建保4年(1216)・文明18年(1486)に起きたと考えられること。

以上である。なかでも、文明18年の隆起と明応4年の地震ともなう沈降という江の島の動きは重要であろう。両者に関連性があるならば、明応4年の地震の前兆として文明18年の隆起があった可能性も考えられるからである。今後、明応4年の地震について、過去における江の島の隆起・沈

降の動きに注目しながら、元禄地震や大正地震、あるいは別の地震と比較検討していくことが必要であろう⁽¹⁶⁾。

註

- (1) 矢田俊文「中世後期の地震と年代記」(『東北中世史研究会会報』第22号、2012年)、同「中世・近世初期の地震」(地域に遺る文化財を活用した地域振興事業実行委員会『シンポジウム災害からみた中世社会資料集』、2013年)。
- (2) 臼井信義「鎌倉大日記について」(『歴史地理』第84巻第2号、1953年)。
- (3) 拙稿「明応四年の地震と『鎌倉大日記』」(『新潟史学』第72号、2014年)、同「明応4年(1495)の地震と『鎌倉大日記』」(『2014年前近代歴史地震史料研究会講演要旨集』、新潟大学、2014年)。
- (4) 神奈川県企画調査部県史編集室編『神奈川県史編集資料集第四集 鎌倉大日記』(神奈川県、1972年)。
- (5) 竹内理三編『増補續史料大成 鎌倉年代記・裏書 武家年代記 鎌倉大日記』(臨川書店、1979年)。
- (6) 国立公文書館所蔵。
- (7) 『看聞日記』(宮内省図書寮、1932年)。
- (8) 金子浩之「宇佐美遺跡検出の津波堆積物と明応四年地震・津波の再評価」(『伊東の今・昔—伊東市史研究』第10号、2012年)。
- (9) 松田時彦「元禄地震」(北原糸子・松浦律子・木村玲欧編『日本歴史災害事典』、吉川弘文館、2012年)。
- (10) 武村雅之「関東大震災」(北原糸子・松浦律子・木村玲欧編『日本歴史災害事典』、吉川弘文館、2012年)。
- (11) 松田時彦前掲註(9)、行谷佑一・佐竹健治・宍倉正展「南関東沿岸の地殻上下変動から推定した1703年元禄関東地震と1923年大正関東地震の断層モデル」(『活断層・古地震研究報告』No.11、2011年)など。
- (12) 今村隆正「江ノ島の隆起」(内閣府(防災担当)『1703元禄地震報告書』、2013年)。
- (13) 渡部瞭「鶴沼・片瀬地域」(児玉幸多ほか編『地図に刻まれた歴史と景観1 明治・大正・昭和 藤沢市』、新人物往来社、1992年)。
- (14) 『吾妻鏡』卷廿二(『新訂増補国史大系第32巻 吾妻鏡 前篇』、吉川弘文館、1964年)。
- (15) 伊藤一美「鎌倉人のみた「鎌倉地震」」(藤沢市史編さん委員会編『藤沢市史ブックレット5 関東大震災とふじさわ』、藤沢市文書館、2014年)。
- (16) 建保4年・文明18年の江の島の隆起は、厳密に言えば、江の島と陸をつなぐ部分の隆起である。したがって、元禄地震、大正地震により江の島が隆起したことは明らかであるが、陸続きになったかどうか(陸続きとなる部分がどのくらい隆起したのかどうか)を明らかにしなければ、より精確な比較検討は難しい。換言すれば、その点を明らかにできれば、相模トラフ地震と江の島の隆起・沈降との関係(連動性)を知ることができるのではなかろうか。

(付記) なお本稿は、科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「前近代における地震活動期の研究—15世紀後半と16世紀末・17世紀初頭を中心に—」(研究代表者：矢田俊文)の研究協力者として研究した成果の一部である。